

# 満徳寺梅香忌

～中泉代官 林鶴梁を偲んで～

令和七年二月一日(土)～二日(日)

午前十時～午後四時

〔会場〕 満徳寺会館

## 盆梅展

～梅茶無料接待～

・金森よし子／切り絵と写真

・大久保幸美／一貫張り

・金田 翠／絵画

・竹山 美江／創作布絵



## 講談

「林鶴梁物語」 神田 鯉 風

二日(日)午後一時半始 木戸銭／おひねり



〔共催〕 磐田市観光協会

〔後援〕 袋井市観光協会

〒413-0078

磐田市中泉一丁目四の七

満徳寺

TEL 三三三-三三五五八

## 《林鶴梁について》

満徳寺に幕末の代官三学(高い教養と学問のある名代官)の一人、林鶴梁の義母の墓があります。

嘉永六年(一八五三)六月二十七日、鶴梁は江戸城にて老中の松平忠固より中泉代官を任せられます。中泉代官は役高百五十俵、その支配地域は遠州から三河の約六万石近い幕府領を直轄し、代官所・陣屋は現在の磐田市の中泉にありました。

安政元年(一八五四)の安政東海地震や安政二年の大水害では、自らも被災しましたが、積極的に広範囲の領民への救済活動を行いました。また詳細で正確な新しい三遠地図を作りました。

安政四年に義母(先妻 久の母)が亡くなり、満徳寺にて葬儀が行われ立派な墓碑が建立されています。安政五年(一八五八)三月に、羽州柴橋代官へと任地替えの命が幕府より下った為、義母の墓を永代供養として満徳寺に残しました。

同年五月晦日、鶴梁は中泉を去るに当たって、その墓に参詣して別れを告げたことが『林鶴梁日記』に記されています。

その後鶴梁は文久三年に「和宮様下向の御馳走賄御用」役、翌年御納戸役に昇進、さらに新撰組の前身である新徴組の支配役になりました。この後、昌平坂学問所頭取を勤め明治維新を迎えます。

鶴梁は大変に梅花を好みました。『林鶴梁日記』の安政二年二月二十三日の記載には、

「陣屋梅花盛開二付、役所一統之もの共、住居江相招キ、酒遣候事」

とあるように、中泉代官所の梅の開花の盛んなるのを愛で楽しんでいた様子が伺えます。

江戸の隠居所の庭には多くの梅を植え、「梅花深処」と命名しています。維新後も両刀を脇にして、外出の際も「何の面目あつて天日を仰がん」と深編笠を被っていました。明治十一年(一八七八)一月十六日、床の上に端坐して「我、病の為に身を滅ぼさる。しかれども、武士たるもの婦女子の手に依り、枕にもたれて死すべきにあらず。」と言って、大小両刀を握り端座したまま息を引き取りました。享年七十三歳でした。